≪教育長メッセージ　第６号≫

『先生』

世の中にはいろいろな「先生」と呼ばれる職業がありますが、多くの人にとっては、「先生＝教員」ということを思い浮かべることでしょう。

学校では、子どもたちや保護者が、そして教員どうしも「先生」と呼び合います。教員自身も、はじめは違和感があるのですが、いつのまにか、その呼び方に慣れてくるようです。

しかしながら、私の中では、常に、「先生」と呼ばれることが「おこがましい」という思いがありました。そこで、「先生という意味はなんだろう」と自分に問っていました。

結果、私が、自分なりに納得した答えは、次のようなものでした。

「先生という文字のとおり、子どもたちより先に生まれ、先に生きているのが自分であり、子どもたちに、自分が生きてきて、正しいと思うこと、美しいと思うこと、友だちとともに物事を成し遂げることの喜びや楽しさ、物事がわかることやできることの達成感や次への意欲など、さまざまな子どもたちの今とこれからに必要なことを、情熱を持って伝えること、それが、先生と呼ばれるにふさわしい使命である。」

さて、子どもの側から「先生」はどのように見えるのでしょう。子どもたちは、教室で座っていることもあり、「先生」は見上げる存在です。子どもたちは、年間２００日程度、学校に通うことから、一年の半分以上、「先生」を見ています。

そう考えると、先生はどうあるべきでしょう。子どもたちにとっては、家族以外で一番身近な大人であることから、大人のモデルとして捉えていますので、子どもたちが「こんな大人になりたい。」と思うような姿であってほしいと願うのです。

日本の教員は、世界で一番忙しいという事実はありますが、子どもたちの前に立つときは、明るく元気で、優しくあってほしいと思うのです。

がんばれ！！　海老名の先生たち。

次回は、『秋の味覚』について、子どもの頃の思い出をどうぞ。